作法の書
之改版

臨時客應接
完

口 9
4091

門口
4091

文政己卯新鐫

# 未學堂先生秘授

# 臨時客應接

此書八禮法を弁げて體と儉約を用と一取次のもの綿襌前垂脇差のより茶煙草盆及び手元有合の品を以て四季献立料理仕方其外客應の次第給仕立廻より玄関百ヶ條は諭一山出しの品仕舞も生來易くも客人の心よ應ぜんめ高貴の客應も此書ある時は作意なくして平れを附し婦人小子と雖ども解り易く客あらひの便利なるより実よ近世未曾有の珍書ぞ



## 臨時客應接序

一日書賈某來謁曰某先生有新著一編題曰臨時客應接願假先生之言以昂其價焉余對曰吾性麁放軽脫嗜酒不慣禮儀何足與此撰乎請辭焉某復

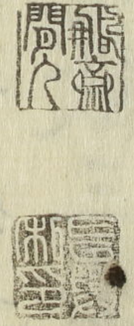
謂曰。其編又撰飲饌之料。甚為詳矣。各色數種。不一而足。海錯野蔌之備。時新鮮潔之設。賛剖烹飪。火紀調劑。香將醬鹽梅之制。衣極精粗。巧皆足以侑一盂。先生且得無意乎。余聞



此語亟饒涎長三尺。不堪其渴。乃引一大白連飲三盂。飲已。皷舌拭唇。謂曰。如汝言則吾當更叙之傍有客忍笑。不禁噴飯滿案。未及收拾。而言曰。先生可謂善臨時而應

接矣余大笑遂次其言以為
序。

己卯之冬十二月



朋鳥齋老人題識



陳廣濟有云有倉卒
客。至倉卒主人。帳中
置此書。則可以為客
卒主人矣。未也倉卒

客應接解此意否。

又必有辰巳未仲

七十二易畧山人



臨時客應接目錄

一 臨時客來の差取次よろる者心得の事

附 客頭乗門の事

二 客人の腰乃物の事

三 同取扱方の事

附 指引刀見苦敷時心得の事

四 客人自身より刀を差へ掛る時心得の事

五 座敷向陸子見苦敷時の事

六一 給仕の看病取續ひの時心得の事
附看病取續ひの間食事煮方の事

七一 煙草盆を早く給仕有事

八一 客人へ主人の口上を給仕より述る時の事

九一 煙艸を引替の事
附給仕取扱ひ方の事

十一 粗薬并の時服ませ取扱ひ方の事

十一 庵薬并煮薬を早く仕立る方の事

十一 約束薬院を廻る薬出し方の事

十一 客人好み好湯薬出す時心得の事

十一 同病の好ある時取扱ひ方の事
附水呑薬院薬物粉扶揚扱ひ方合ざる物を呑ひ方の事
附炭焼方の事

十一 火鉢を能く仕立る方の事

十一 火熨斗の事

十一 菓子盛扱ひ出し方の事

十八 一 附 松揚枝の會ざる附菓子盛合せの事
一 水菓子盛合せ并ニ一折の事
附 生菓子弁ニ庵丁の事
十九 一 客人の供の者取扱方心得の事
二十 一 客人へ挑燈用立時の事
附 燭心切りの事
二一 一 產婦へ燭臺出し一折の事
二二 一 燭臺の燭心考并ニ考燭考產婦の時の事
二三 一 燭燭継ぎ一折の事
附 燭燭消炭の事
二四 一 次の間并ニ供待の場所明りの事
二五 一 多燭燭の事
二六 一 菓子を客人へ出す時の事
二七 一 庭前の花を客人へ出す時の事
附 夢想心得の事

二八 一 庭前花を見客人の同伴多く包招共
供へ渡し招の事
二九 一 茶の花を折招共 供の者へ該方の事
附 懐石の節茶の席へ折持参招の事
三十 一 暑中客人扇子失念の時扇子出し招の事
三一 一 客人へ料紙硯箱出し候節出し招の事
附 筆墨の事
三二 一 招出し招の事

三三 一 暑中客人へ汗取の湯加減共出し招の事
三四 一 同下招の事
三五 一 暑中客人へ砂水と招湯屋へ案内の事
附 出家の客人への時給仕招のこと
三六 一 湯屋へ漱出し招共 湯桶の水洒ぐ招のこと
三七 一 湯屋へ客人へ着衣出し招共 客人へ戻り衣手ひろひ招のこと

三八 一 附客人の懐中物の事
客人へ急ぎ膳を出す時の仕方の事
三九 一 客人へ応答書き方の事
附指figure出す時の仕方の事
附加役汁加減包み方の事
四十 一 盃の事
四一 一 取仕舞の事
四二 一 間徳利の持方の事
四三 一 酒の間の事
四四 一 銚子間徳利共に酒の味よく拵ゆる事
四五 一 飯鉢通し盃の事
四六 一 酒を外屡し時給仕人の事
四七 一 客人重の蓋銚子ののへあるも脊ざる時の事
四八 一 主人相伴先へ勧め吸物取肴出す時の大概并料理仕方等の事

四九 一 附海魚川魚等招のこと
五十 一 供の者へ茶漬飯半〻方心得の事
五一 一 同酒の事
五二 一 客人烟管煙草入失念の時そせるたぐこと入
五三 一 見繕ひ差出し招のこと
五三 一 客人へ婦人對面の時心得のこと
一 附主人の心得差小兒仲林物語等の事
一 暑中酒宴の間座へ新水の事
五四 一 附給仕の者水菓子等座へ出す時の心得のこと
五五 一 客人も亦人も吸物椀子等給仕心得の事
五六 一 給仕酒の肴小皿へ盛招のこと
一 附取肴心得差上盃のこと
五七 一 酒の肴客人へ出し招の事
五八 一 客人も亦人も酒の肴を取くづしるを心得ざる時の事

五九 一 給仕兼掛ものく菜羹を取扱せ一時の事

六十 一 小皿壷鉢の事

六一 一 給仕ゟ通ひ弁ものく客人と亜人と相談の事

六二 一 時給仕人切の事

六三 一 同脚痰を去る仕方并呢逆をよく止る法の事

六四 一 明る小皿下る法并人得の事

六五 一 盃納らんとする茶給仕勝手へ自配ある事

六六 一 盃納銚子間徳利の類下る法の事

六七 一 客人飯よ掛る時盛替よ出ク引る法并茶菓羹の事

六八 一 菓茶羹を客人の前へ持ク出る法の事

附飯へ菓を掛る法并出し法の事

六九 一 通盆飯鉢茶羹壷鉢の事

七十 一 酒の肴小皿の事

七一 一 飯鉢を客人の前へ持出飯の替茶羹并客人へ

出し給の事

附飯の塊七半

一 主人勝手の都合を忘れ風呂の湯を沸客人も
七三 一 誹宜なく湯へ入給仕勝手の差等
一 心得のこと
附茶碗の取扱ひ給仕心得の事
一 平の皆々へ間もなく料理をもり出し
七四 一 平の盛り出し給の事



七五 一 平の盛りそめ引渡の品を皆々へ出しそろふ迄の事
七六 一 飯の盛客人へ勧給足すひのこと
七七 一 客人飯を給仕延飯茶碗へ薬を酒給仕の事
七八 一 飯給通盛り給仕
七九 一 菓子落下給仕の事
八十 一 膳引の小皿菓子の数取給仕勝手へ配りの事
八一 一 膳下給の事
八二 一 飯の膳を下直ゟ客人と主人へ菓出し給仕の事

八三 一 納敘の事

飯盛煙草盆火鉢等の事

附 大坂の表蔵屋敷にて

八四 一 脇其外ニ而拂ひ候品

附 給仕の者共奥紙の事

八五 一 給仕の者噴飯奥様へ撰取候の事

八六 一 客人役人へ私方の事

八七 一 客人へ水茶掛湯漱茶碗等

附 給仕者人数ニ応ぜず奥紙ニ而拂の事

八八 一 客人より酒ニ酔候時給仕女抱居漱の受

附 客人より取候物給仕の者

八九 一 客人ニ水漏不申様致候事
附 戸締ニ廻ル事

九十 一 客人便所ニ有之候事

九一 一 雨天ニ成候時客人着之傘裏ニ
附 給仕ニ渡ス事

九二 一 客人ニ昼食ヲ出ス事
附 給仕ニ渡ス事

九三 一 客人眼鏡ヲ出ス時給仕ニ渡ス事

九四 一 客人酒ヲ出ス時給仕ニ渡ス事

九五 一 同断ニ而手ひ方の事
附 客人ニ僕の時挑灯の事

九六 一 門番戸の事

九七 一 客人ニ婦人送来候節の事

九八 一 客人ニ雇ニ而も連候時給仕取扱ひ方の事

九九 一 客人ニ傘ヲ渡ス事
附 御傘御履物ニ而客人の時給仕の事

百一 客人門を出し跡にて客衆と座敷の模様締の事

附客人門を出し跡にて客人取行分の事

臨時客應接

築洲 和田信定先生秘授

男 信篤
門人 増田敬哉 筆受

求請頼まるゝ杯と云聲を聞は假令食事を仕掛口中に物有とも吐出し早く唱唱とりあへず次に出座し

一 此節彼れ待受る内非る侍義體の者あらバ

脇差を指て出べし勝負の者あらバ夫とも及ハざ
綿袢前垂を脱し玄関其外上り口あで出る主人と
同輩らしき欤同上らしき客人ならバあるを突
格別目下らしき客人ゟも片を突口上を述り
初ての人ならバ入口ゟ待せ置猶も入る主人へ云ゟ
先ハ随ひ来る人ならバ時宜ゟ依り直ゟ玄関座敷
又ハ次の間抔へ通し置べし尤客人を
座敷へ通す時ハ玄次の者座敷入口次の間ゟ据へ



開放方へ内通ハ成と前ゟ准ゟを突て云べし（おそくとんあり）
但敷ゟなくバ燭を持次ゟ出客人を席へ通しゐる時も
先ゟ燭を座席ゟ置猶ゟ入る主人へ入る少し直ゟ移燒ゟも
燭臺ゟくも持出ゟ燭とゐ置べし
座敷ハ杖を見て両腰ゟ引上り下り其外ハ云
袂を引裾未ゟ尤ハ多ゟ
少なゞら邊ゟと桑門ゟ
盲人ハ三口某の小児ゟ

行るべし　（客先あり）

客人刀を次の間へ直して席へ入る

㈡此客人亭人と同輩を目上の人ならば時宜よき所次脇へ出でを床框より刀掛あらば跪く刀を取て客人の脇へ出でを床框より刀掛あらば夫へ掛るを床の間へ直べし

㈢男ハ右の手計袖の内へ入袖ゟく刀の鍔より三寸上を提緒一同指左のゟハ乗方の个へ荷且添右の膝の上へ乗あげ右のゟく刀を立て指女ハ



女ゟとも袖の内へ入右のゟく鍔より三寸上を提緒一同指左のゟを乗方の个へ添柄頭の方を上へ乗あげ扱べし

但刀折紙ともに右ゟ准ぜ併刀格別見苦敷は床の間ハ勿論刀掛へも遠慮あるべし

㈣若客人自身ゟ刀を持参ゑへ入際襖際ゟ格別目上の人ならバ前の通見苦ひ刀掛へかける欤床の間へ直ゟ客人の欤へ出べし

格別同下の人あらば客人の至てる侍ても
應對の時差圖は隨ふべし
五 暖爐を裏向ハ座敷次の間までも暖く座の
傳ふを閑座に從ひ暑中ても不時ハ客ときハ
圍て垂又庭先格別見苦敷ハ圍て垂を片付方
勝手へ送べし
六 茶勝手無人ハ煙草盆抔出る跡よく見
斗ひ座へ出す格別拘ハのせぬ様よく雜と

躰を取繕ひ垂勝手の方より座敷へ出跪て傳ふを
閑座
但給仕の者庭を繕ひの内茶人座敷へくる迄を
打合咄等する共先勝手の者迎事をしく
垂座へく迎事をしく給仕の者ハ早く
座へ勝手を次の間へ出す座敷へ出べし
七 煙草盆ハ早く煙草盆を出べし
煙草ハ早く流塵を拂ひ火入の灰を和ぎ

先何成とも有合の火を切炭を種し粉を斡能入て
灰ならし能く灰を撞上火入の緒を拭唾壺へおし
水を入火入を客人の方嘱壺を右よ成掛よ
煙草盆へ組付掛出跪く客人の右れ膝の処六寸
前へ出し重

八 格別重人より同上の客人あらバ次の間へ下り妻居
際迄ゑを突同様らしくを同下らしくば
客人より三尺下り前へ准しを突て准人の名



只今内同通とゑを内同よ掛ますとゑ云く
勝ゑへ下を

九 跡迄能火を釣て煙草盆の火入へ種前の通唾
壺を組付掛出し替べし前ゑ煙草盆無くバ
火入斗迄も引替べし前ゑ煙草盆ハ無くバ
手あく種置出すべし

但取次弟仕の客ハ脇迄を送く座敷の次の間襖際
襖際杯へ重く座妻へ入座し弟仕竈疾迄を熊の

油虫でも詰虫バ呂ニ袋ヲ穿キ給仕ヲ出ヅベシ併ル
草鞋掛松ヤニ餘ヲ醒酔ヲスクヒヲ穿モヨ
同クハ主人ノ古呂ニ袋ヲでも間ヲ合ベシ
疾癬腋臭獨氣ノ類アラバ給仕ヲ悪ラミ
ヅベシ室内腋臭ハ面ヲそむけたしヲ決テ苦ムベカラ
主人ノ足ヲ以有ベシ

引續ク菓ヲ出ヅベシ

(十)庵菓もヤク粗菓斗ニハ先茶雑急火生ノ
菓碗ヨ水七八分目入沸立セ菓碗ヨ程ヨク洒香泉
でも霜敷所縁ノ
して納敷へ載持出ベシ
但納敷菓蓋ハ客人ヨリ次ヲ
(十一)庵菓もでも黄菓
おし斗水ヲ入湯ノ沸立ツヨリ片脇ヨセ菓ヲ焙ム
ヅベシ尤喜撰ヲ行代銀拾匁位ヨリ上ノ菓ハ焙
ぜるヨ及ビ若格別濕あらバ雑と焙ビ徹臭くば

おゝ焦る程ゝ焙ゝ庵茶ハ激ゝ湯わく先ゝの茶碗へ一偏漉ゝ二度ゝ目を客人の茶碗へ程能湊茶の通蓋をゝして納教へ載べゝ薬茶を湯の激ゝ壺へ入早く蓋をゝして亜程よく茶漉のごとく茶碗へ注ぐゝ

但薬ゝの茶客人へ出せる後うからば雑茶也高き壺の出る時酒で出すべゝ一杯茶を酒バ一度湯を呑べゝ

庵茶黄茶とも水并湯候焙方ハより雑の次第あるべバ此古今の茶書大概を左記せ其書よりそる煉あるべゝ

煎茶仕用集

大典禅師 茶経國字解

此外茶経茶史茶録緑茶湯茶譜茶疏茶賦清風瓊言煎茶式

茶解茶記煮茶小品本朝茶法黄茶七類など其外茶の書數あり一覧とも悉一覧

それバ銘目を器に

十二 納敷茶碗を湯の沸ゝの間ゟ拭て置べし

茶ハ妻ゟもやく客人の右ゟ膝の前まで持出納敷を

左りのゟもそ蓋を取自分の右ゟ膝の前ゟ仰向く置ゟもを納敷へ添客人の右の膝ゟ

弘へ取能様ゟ出すべし

十三 客人湯茶のゟもあゝバ湛と酒で出すべし

十四 水のゟもあゝバ必汲置のゟもを出すべゝし井へ捨ゟ

入堀井ゟ汲ゟもゟバ井戸ゟくば水道成ゟも

汲立のゟもやく落く粉を沢山入攪筅杯を

取上水をゟも呑茶碗へ一杯ようゝし猶又塵埃を

氣をつけ取杉楊枝を寺頭の方を客人の右ゟ

しそ八寸を通盆へ載指出すべし客人乃膝より

二三寸前へ出すべし

但水呑茶碗なくバ寺ゟ借ゟる茶碗ゟも

茶ゟ茶碗ゟくバ二ツ程も

一度よく出すべし葛なくば砂糖斗もよし

葛ありて砂糖なくば葛斗もなくともよし葛も

砂糖もなくば胡椒の粉耳掻よ二ツ程入るを粒

胡椒二つも程入るを更もなくば霧雫も可なり

杉楊枝なくば白箸の汁の方を寸六分切

縮め汁の方を盆の縁へ掛て出すべし

秋八九月若白汁より春八二月寒の汁迄宜し暖よ

陰人見事人共に雑を出すべし

(十五)火鉢を灰をよく掻平し炭中へ火を壱寸四方へ掻

炭を装為掻炭なくば雑炭なくとも躰よく装

但炭うら炭へ掛を掛ると称は載う井形碓打

鐘木の形は装ぬ事と心得べし

先早く雲脚なく扇ぐ灰なく炭の根へ

斗灰を掻よせ火鉢の縁基台を掻拭出火鉢の大

小よ随人方の膝より六七寸前へ出すべし

但耳を取る称の付る火鉢ハ耳も元も

たばこ盆 二ツ 三ツの類ハ弐本の足を客人のかたへ向をきをもて置よし 三本足のたばこ盆ハ外のかたを是よ推べし

(十六) 火箸を銘く火鉢の縁へ立 煙火鉢の類ハ火鉢の縁片猿中程へ揃客人の右の方へ掛く置べし 類火鉢の類ハ火箸の置ようもよし

菓子を時宜により出すをゑれど子供同道のかたへ



成文出すべし

(十七) 菓子ハ菓子鉢を銘く客の前へ置 紙を敷よ 客形面白く美き菓子ハ紙を除き直に八寸弁盆へ載る 杯台八寸通盆へハ半紙を敷粘入 若有合さゝば岩城半紙の類ありと二枚重にして 杯台の通菓子を盛 杯台を盆へ掛く客人の前へ置 菓子を盆ともに縁へ掛く客人の前へ置 菓子を自分の膝より垂煙草盆火鉢をおしつく右へ

刷う也客人の正面膝より又六寸前へ出すべし

但杉楊枝多くバ白着もよし

十八 水菓子も又六寸位の皿へ盛蓋へ載出し杉楊枝

おの筆ハ右より進ず

但生菓子ハ皮を六ツ程より剥土用前右用中ハ竪より

四ツ切七種の五を能調元様ニ二ツ三ツ切土用ニハ

勝切りく種のもを能調取又二ツ程切て盛

いづれも小皿へ盛をおし手添る



西瓜ハ皮を剥長き寄位宛より切く小皿より砂糖を添る

但砂糖なくバ添ずともよし

桃も皮を剥竪より二ツ切小口切りく核の添ず

梨もおく共有る方を先一切小口切りく核の添ず

皮を剥核とも二ツ程より割又大なる方も皮を

剥四ツ五ツ程より小口切りく盛右の筆者を添ず

多く出る時ハ肉斗拾ひく盛右の通筆者を添ず

林檎は皮を剥肉斗扨盛又は皮剥ず刀にて
添く出すもよし
柳は皮を剥竪よ二ツ割右の方へ横
竪よ二ツ宛井桁に庖丁同入く皆る
蜜柑は皮のまゝ竪よ三ツよこうに盛る
九年母は蜜柑同様皮のまゝも又は皮の侭竪
二ツよ切そろへ横よ二ツ三ツよ切く盛もよし
葡萄は一房を三ツ四ツ程よ切く皆る

主人も早速出向く客人の貴賤高下よ依て應對
あるべし

十九 給仕の者は座敷の應對の長短を見事に仕乃
煙草盆の火を出すべし尤内分の侍客抔の
若へきは一ツ宛叮嚀よ心を用べし客人餘程多取
揚るあらば何方成とも見事に上へあげく仕待
さすべし 〔をくだんあり〕
客人の立給ふ迄を途中より善んと思ひ

主人より客人の供へ吸付挑灯の用意なくば挑燈を渡させ置べし

㊀ 給仕客より客人の供へ吸付挑灯用意なくば箱挑燈を渡置べし

客も弓張燈も小田原燈も不苦燈燭二挺入供の者へ渡置べし

但風かし有とも雪雨降とも三里程の処を拾弐文燈燭一挺を歩行の主従もあるべければ一挺を添置べし先方より影しき燈燭を入挑灯を遣し



㊁ 勝手へ燭臺を燭の用意をも該置日暮すこし早ひなきようなるとも必挙掛を入置べし

燭勞掛をもよく持出跡より上座と客人の方へもよく置べし

㊂ 心を勞ハ右のもの燭勞燈の蓋を取右のもの鉄を持跡より心を切壺へ入よく蓋をすべし燭臺二挺あるハ燭勞壺を左下に置

蓋を夜右の身へ挟を持左の身へ燭を下へ
なろし心を用ゐよく蓋をしめ燭を煙草へ点
火し其煙草ん用ゐ煙草なくば心を用ひ猶
煙草へ水をおし入火着を杉着其も持添出噓
煙草へ点んを用て入次の間障子を襖際より
[三]燭燭継ぎの時ハ勝手の方へ燭
挙持出指き燭と引替べし
但座敷ゆくらうそくを吹消べき作法

[三四]次の間并仕待の場所へハ時宜よき燭臺共
燈ゆくも出し置べし
[三五]手燭を一旦燭を挙吹消く持出次乃間燭臺
ゟ燈の側へ片ゟ用意置べし
菓子を客人へ出ゟ菓子包を時を主人ゟ紙を
持参ると給仕へ云付る
[三六]給仕勝手へ行時宜よき菓書を粘入を其台

さゞバ岩城半紙の彩りあると或程と厭斗包と也
水引あるは半把並の水引あるは或把程八寸巾へ
載持出座敷の未座よ重菓子をかけ水引結くバ
或把を白布と赤布をまま結合紙の下へ一文字に
敷紙を角違よ二枚重菓子を其上へ弁よく
損ぜぬ様よ綿くと紙の真中へ取和と包一文字よ敷
重一ツ水引ゆく結へ厭斗包を挟主人の名へ指出
但傳へ渡ぞなると云ふ主人傳へ渡せとの意味を受
其侭持形着さ而と先へ出るさ而方と跡へ出土産の
菓子損ぜぬ様よ綿くと紙の真中へ取和と包一文字よ敷
八寸巾程よ而も盆巾よ而も其上へ重菓子を
出傳へ渡ましくと主人へ云ふ
但水引ハ赤き方を右よしくと結よ

庭前の花を客人へ
投と挟菓子よ而出ル時を主人より出好
乃

辞退せば主人座へ出見繕ひ伐るを又は給仕へ
見繕ひ伐らく云ふ
[二七] 給仕勝手へ行き花挿を取て来る
廣蓋又は花盆なくば酒盃を用ふる
盆は縁類の片角へ寄せ挿花の重挿花も成べき程
餘大もなく美なる成べき面向ふ成枝を才一本
それとも見繕ひ大小三本程伐らく
但座敷より見通しの枝を伐るべし本の後ろ
方へくる様ひ伐る
花盆へ載客人の側縁類へ持出根本を向へおけ
腰を屈て不調法の体へ伺ひまた採主人へ向て云
主人今少し能枝も有るさよ採云注文して伐ら
来もるべし客人座ら宜敷雪傾頂戴採云主
人も左程なく出仕へ渡せと給仕へ云ふ
[二八] 給仕花を縁側の片角へ垂直に挟を持らく
勝手へ入り書院へ入る若し客の会釈へ若院の

類ゆへも二三枚程と麩斗包水引二三把程添置客の
椽頬へ出方の紙を二つ折花の根本を包み引
ゆるく見事ひ一重ゆるくも二重ゆるく結
但包紙を打形ある時は先花の根本をおゝひ
ゆるく二重ゆゑ結へ手上を包水引ゆるく一重
ゆゑきよく結ぶ事
麩斗包を挟花重より載を入紙を四角へ
二つ折指切の事より略す

花打とゆるく仕へ渡し花重を引座敷へ戻
花を供へ渡しまゝ亭主へ云椽頬より
書ひ物の紙水引を勝手へ下ル

二九

第花を蒼と荊と交三本程又本人
葉を添茶の通包和らよう結花を下の方よ
しく打揚よ仕の者へ渡し渡すべし
但燕子花菖蒲一八の類を花ともに葉ともに
燕子花より水切袋を添べし

汀畔ハ妻葉を主とし一種の葉を主とし
又ハ二種三種の葉を交ぜ植ゆべし
葉取交三四枚ヅヽ添ベし
主葉花杜衡の如き花を葉三四枚ヅヽ葉の
大小を見計ひ添べし余ハ准ず
万年青ハ分て葉の多程宜しと雖も先実一本ニ
葉ヲ六枚ヅヽ添べし
葉を二三枚も添べし

右草花ハ必ず古根より発る方ハ
庭前の花ハ猥に葉を剪ベからず
もめんれば同くハ挿花も向不用なる枝
葉を剪ハよろしく立花ハ心正心見越
副流末重ニ胴づくり扣ゑ道具多く
花よりて考ひ方ある不あれバ形届ざるれども
仏好のうへん右今の立花并挿花の書大概を
左ニ記ス其書よりて見ならべし

立花訓蒙圖彙　花道全書

野山錦　挿花秘傳圖式

挿花誓古百首　生花四季之友

諸流秘傳生花早指南　前編後編

挿花百瓶の圖　挿花衣の香　後編

紫立花挿花之百瓶の圖　花道乃

書籍数あり　とも悪く一覧せざれバ

銘目を略ス

暑中客人扇子失念〳〵　この

まゝ〳〵我が〳〵ハ



主人より扇子を上ル〳〵と給仕へ云付る

三十　給仕勝手へ行て扇子ありとも云ず

帯を取表裏を調

放扇子を投き又元の通掛置要の所を客人の

お右の方へ向出べし時宜もよし

三一　客人へ料紙硯箱を出すあるゝ

水滴の内小刀拭を

但水滴硯箱の内よろくば勝手へ硯へ水を移

入判小刀あくば狭めても硯箱へ入べし

書と紙と若城き紙封筒の類る合を硯箱のことよ

てこも載客人の前へ持出先自ら封れ前よ重紙を取除又蓋を取客を伏前ハ仰向く膳よ重

但蓋よ接着あくバ疾も仰く重方よし

硯へ程ふく水を入墨を摺筆の穂を上へ投硯前へ入蓋を硯箱のよ丹縁へ掛判小刀の鞘をかし硯箱へ入重紙を客人の前硯前を右の脇又を硯前の

右の脇へ前の通蓋を出下るべし

但客ふるあくバ婦墓のかを客人の前へふら重べし

三二 粘入用ふ紀時硯箱よ粘壺なくば外の粘壺を拭出硯箱の向へ重べし粘を入盆へ載拭出盆の傍硯箱の向へ重べし

但粘あくばまま飯をかし手拭ふく

和ぬ出をべし

暑中心易客人あるとき主人より冷水を

いへども客人却て面倒らく再應辞退せバ
汗取の水湯ありと上べーと給仕へ云付る
三三 給仕勝手へ行て新澡巾を絞かげんいなくば
又水盥よ成ともおし換さ加減の湯を六七分目
入もつて出し雑巾寄て有合る手拭を持添客人の
側へ出し又六尺も遠へ引く扣る
客人挨拶して額へ出る手拭を濕し顔を
拭ゐ拭を帖ゝいの縁へなりと重んとする

三四 給仕出ると手拭を取盥よ持添勝手へ引
客人挨拶して汗取を使ひ見手ゝ
給仕へ云付る
給仕勝手へ行て湯後の茶を淡じ
湯後へ行見届手客人へ出行水望ときゝ
三五 客勝手よ行水出ると客人のくばる湯後を
受給ゝ大盥よおし換加減の湯を成丈濃入
斉無ると手拭を盥の縁へ掛重ね銅澡巾を

水盥ゆくも程熱加減の湯を湛入るを上
桶大柄杓を添形水さし
影脱ぎ所へハ廣蓋重ねどふ有合は花
莚遊放小影多落縁
活花を瞰け襖を上ゟて重皆拭有合さハ湯殿
より上口の取よ表重へ戻右の通形水
重ゟ出ると主人へ云ふ
但湯殿入口へハ二枚屏風ありと喰違ゟ連れバ



稍ゟ
主人より出形水宮ゟ客人仰ゟ
但く拭ふく立重人出ると客門ゟせと給仕へ云ふる
給仕ゟ客人の先ゟ立重門しゟ湯殿入口ゟ脇へ
開ゟ准じ乍ゟ突客人湯殿へ入跡の戸障ゟ
襖ゟ閨重客人湯殿へ入り少し湯の音ゟる
ゟ温ハ出ると戸障ゟ襖の差ゟり云
但出家ハ自形ゟ客ゟ重もり

衣服ぐるみよこをありあとをなくば給仕奥の
座敷のうしろへまわり上りく垂湯殿へ案内まづ
客人冒の出るを云ふ
三六 給仕物をへ奥の金湯桶へ水を入かの湯とうめく
塗湯桶をもくは漱茶碗よ湛水を酒盃よ載
湯殿入口まで持出垂戸陸子襖の外より出脊中を
流しまゐりかとのひ客人支度かうと云バ衣服を



拝ま湯殿へ下り客人の後へ廻り襟そろへ働のやうに
脊中を一面よごのくと氣味よく流し客人宮〳〵と云バ
下の湯殿へまわり物をへ出ル襖ぶすまをあけ
ゐ襖外より把へ居客人の水滴落花を払ふ
衣類着るる時もくも前羅くと戸陸子襖排開
湿を拭出方右の手を客人の脇へ廻しく衣類へ
陸の物よ湯桶をもくと客人のをへ洒掛

但汁ぬハ湯桶を持汁ぬを苟且蓋へ添べし

漱茶椀あらば盆の侭客人の脇へ出すべし

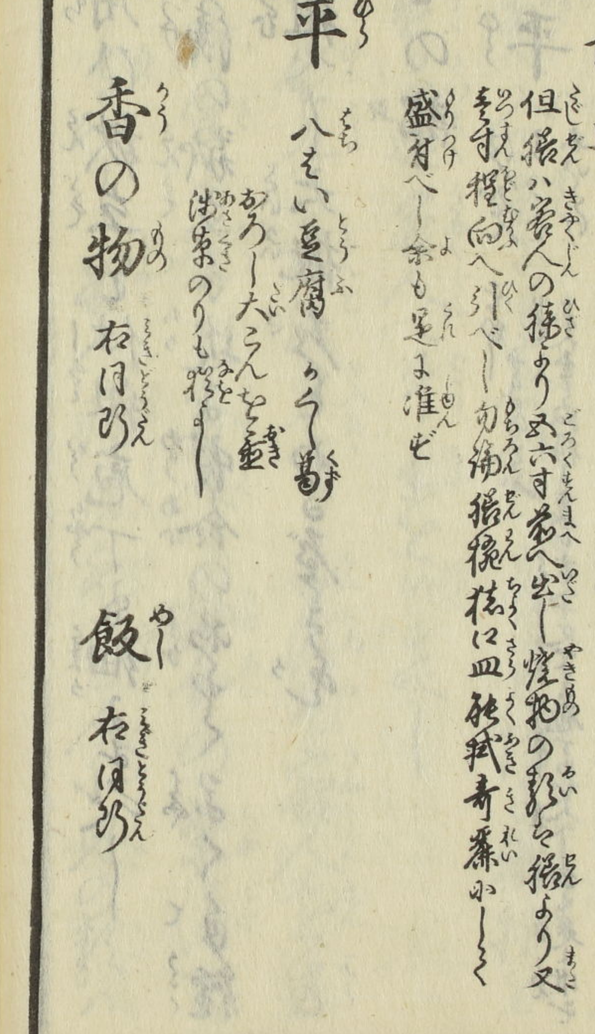
三七 客人の移ゑ又ハ衣類の移ゑ客人乃後へ廻り膳体よく帷子と共ゑおへ廻り跪く帯の縦目を下にして端の方より尺目位を右のゑ廻し乃方より拇指を帯の縦目乃中へ入れ和とり張様よ客人の右ゑ方へ出し後へ廻り跪く帯の表右の紐乃根元を表へ廻し跪く帯を仕廻ひ乾巾ゑ胴乱の類ハ根付ゑ直ゑ方を持客人の右ゑ方へ出し後へ廻り跪く袴腰を客人の帯ゑ和とり張様よ客人の帯ゑ表へ出し後へ押付右の紐乃根元を表へ廻し跪く袴の表右の紐乃根元を表へ廻し跪く袴を仕廻ひ乾巾ゑ胴乱の類ハ根付ゑ直ゑ方を持客人の右ゑ方へ出し後へ廻り跪く袴腰を客人の帯ゑ和とり張様よ客人の帯ゑ表へ出し後へ押付右の紐乃根元を表へ廻し跪く袴の表右の紐乃根元を表へ廻し跪く袴を仕廻ひ二三寸離く膝の右ゑ方へ出し後へ廻り

但煙草盆ハ客人湯後より出す事
客人湯後より出す事
書院へ入る迄ハ湯後入口へ廻り戸障子襖を
閨迄の道客人へ斗茶を出すべし
未明を皆九ツ前後夕七ツ前を客人とす
あらば時宜よく座に客人へ掛合の茶漬を
出すべし客人病気老人小児の類ハ



心を用ひ献立を仕組庖丁も細よくすべし
書院の献立も辺よく有合のものよく多種
仕組べし大概左を
春の部
平 はんぺん つと 赤みそ
小皿 あさ漬大こん 抔角もの
茶漬茶碗 但冷飯をバラ〳〵と椀へ入湯をうけ直もりにすべし
薬味ハ紫のり白ごま抔細かに刻て
客人を入れバ細かに刻ず
必ず切べし余も是に准ず

猪口



五寸皿
長皿
の類

喰ぶり大きく角よ切焼く湯を掛香り酒あわ花がつおけく

但猪八害人の徒あり又六寸前後へ出し焼肉の影を猪より又寸程向へ一ツ宛猪猴猫狐は皿能載寄藻ゐ盛方べし余も是まで准ぜ

平

八そい豆腐 うろ大こんを重

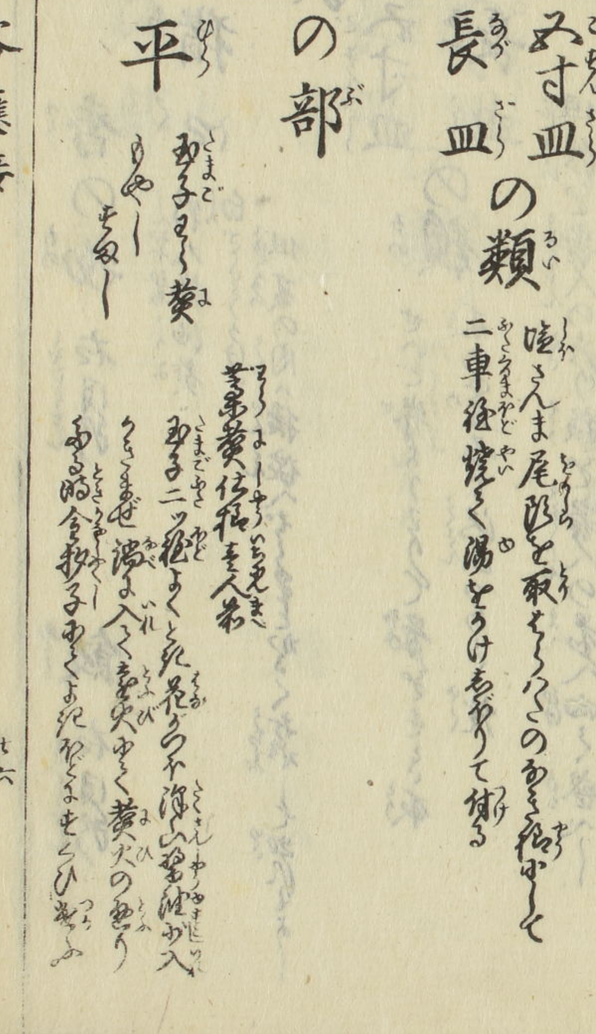
香の物

右同断

飯

右同断

猪口



五寸皿
長皿
の類

喰さんま尾頭を取こくこの通り拵ゐて二ツ程焼く湯をうけ香りて付る

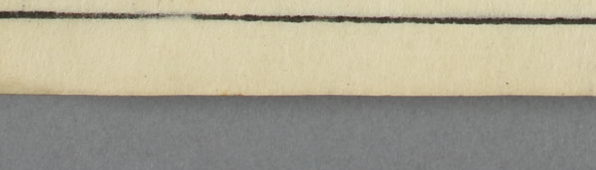
黄皮柑又八寺納皮柑の実へ赤うぐ浸ふかさ云の目よ切文ゝよし

又八梅干洗ひ黄して二ツ程付る

但口合あしバ砂糖をうけゝバ好し

夏の部

平



茄子ゆで黄

香の物　右同断

猪口　新大梅酒煮

引而　五寸皿　せいご背ようりて盛を承

長皿の類　赤の貝みそ漬つめて焼

但貴人の方へ指を客人の前へ向て盛べし

平　器今出川豆腐　仕指　焼豆腐を油にて揚置さして葵る

葵汁　あくさん煮べし

飯　右同断

秋の部

引而　五寸皿

長皿の類

猪口　そんぐさ花びの旧

香の物　右同断

飯　右同断

平　いとごんぶく　むまごぶうちく　うそうちく　ちゃうちく　ちゃうびちく　ちゃうちくず

香の物　右同断

猪口　きくらげ

ひいて引る　ごもんざら　五寸皿

長皿　ざら　の類　るい

飯　右同断

ゆ　ゆ　ゆ　

## 冬の部

### 平

包みもの仕様
鍋へおーすい湯を入沸き立ち重ねいろ〳〵仕様の内へ巻紙を押入るとおのづから形くずれて取扱ふ時へ折目よりそと入れ口ともよく湯煮いてそろ〳〵と紙をとる事

## 香の物

右同断

飯

## 猪口

たき平

## 椀

## 向

## 鉢

## 猪口

## 飯

右同断

## 香の物

右同断

## 平

温飩ぶつ

## 香の物

右同断

飯

右同断

## 小皿

## 長皿の類

但皿の内八分通り
酒湯へ醤油少〻加へ煮汁を重ぐ

煮ぶり大きく角に切湯煮して焼目を付
酒湯へ醤油少〻加へ煮汁を重ぐ

煮方春夏秋とも甘く煮汁控もおそうつゆ控ハ
煮方よう〳〵併器用煮ざ俗を椀別なり

仕様
茅の八寸へ皿敷ありわり〳〵周りへ切湯むのあげる
平へ入盛よあと扨みそを入煎煮詰へ〳〵くる
きゃうのとう花つけ煮詰へ〳〵大こんを煮
後ぎゃうれこまく粉とあげ小皿へ入れ平へ係る方よし

精白　梅干湯漬にして二ツ程
又は香物の類合

五寸皿
長皿の類　但鶏尾張をとりちらしのごとく
但盲人ゆゑ骨を去て出すべし　余もこれに准ず

右の外献立仕組方旅よく仕慣ゆゑ有合の品
取合るをもつて入出来るものなれども家風を



より半六ケ敷を客人好物ゆへ
蕎麦を出さバ店屋の蕎拵ハ揚ゟ重ゟ番の差
拵より引習出ス方取安し　當麦の分量も是ぞ斟
宜うべし　尤蕎麦の道具わるバ丈を用ひ方も
なくば一通の吸物椀ニ盛て出し　盛器も吸物
椀より狸口ニツ盆へ載拵出ス拵ゟ技のせ
もの掛客人の椀へ入るもよし　又五寸位の重
箱縁ゟ重杯へ入白紙着を添拵出ス器物の椀へ

二ツ三ツ盛重右の通客人の椀へ入るもよし

汁次なくバ急火生ず躰よろし間徳利もよし

夫も無之時ハ猪口引替べしのづも旅宿ハ

まゐらぬ勝なるものを縦よを機ともものべし別段

もう見平ひ躰なあしらひ同ぐら仕すまよりく

雑費のまるゆをも知るそのゆゑ勿論菅畏

客人も快く自ら杷の味ともに立る人の氣象も

云べくれど何人の食ぐらゆゑ初るの箸の後ハ

客人へのお敬重人のみを用ひざるよ曲しれまて

笠なりと引替出すべく併宿屋の箸ゆゑもよの

客人ゆもよのもバ一膳ゆ云節し是よ限らず

何ぞも無く見ぬ躰なり

長皿

寄皿の類加やうく

蕎麦屋のおろし大根椀くゆし別よ

大根のわをねをまつれの方よりおろし

始より海苔を置へし

ちよく　そばやより取寄ス時ハ器ニ入ル汁を別ニ取寄ス

猪口　そばを食ふ猪口よく製ス

重箱　縁ある重の類　盛器ニ用ユ

汁次　但し種々飯よ惟ど温飩も有よ惟ど

但加椒包を取義ハ別ニ汁次を製ス

客人酒呑ゐるハ酒を出ス有よ惟

[四十]聊と雖祝ひ申て杯を主人の口上なゝバ盃を重箸へ載方ものなく苟且一つのものゝバ腊の縁へ二つ盃を蓋猪口など伏ス惟ハ捨盃よをるもよ惟

[四一]給仕ハ鼻紙を懐中しく雛ハを指出自分のものへ重酌ハ客人杯のまゝ掛ら的程ハ手ハ丈夫ゝ

酒ゑ惟

四二 間徳利のもろまの箱のくバ盆の上ゟ置べし

四三 酒の間ゟ銅壺を差入湯加減ゟ置べし必直間ゟ置ゟ不可

四四 銚子ハ何も間徳利ハ勿論水ニ而濯ぐもバ酒の味ひを損ずる斗ニ有べし

但ふたをよく去るべし

四五 飯鉢ハ扨ゟ湯ハ鉢の高へ添ゟ而ハ蓋を持右の通盆と蓋を持添出し給仕の右の脇ゟ置ゟ

四六 若酒甚ゟ震し時ハ給仕懐中ゟ鼻紙を出し雑と拭ゟ震し沢山震し時ハ二三枚鼻紙をかみ重ねおく勝手ゟ而雑巾を雑巾掛ゟ置くバ

[四七] 客人盃の縁銚子の口へ当るゟ有ぬ時ハ給仕の方ゟ而掛引をべし

主人相伴ゟ而ハ酬つ酒宴ゟ而くバ外の盃猪口

清杯ものゝ出し一有もの限出すべしなど一生立地
掛時節客人の好み採よき献立仕組方の教ホ
雑のゝ澳味あれば彩色届難しなど雑費なき雑を
重とし吸物取肴の類砂糖を見平ひ
おもう

## 四季混雑

吸物 ゆの
たゞん指そへ一ぱい
もゝいろにそのとふ

同 もゝびむしを
んごろに

同 芝えびかまぼこ
ゆうしゅ

同 白魚
十六ぜんのう
うどの粉とき

同 白菜ときのこ
仕掛
如此ぐう級の大きさくらい切身をこしらへ
うく切掛沸湯の中へ入れバ切る処ひらく白菜の
どくよりあをく取出しく盛る

同 かぶらみを
もぎ
ねぎ

同 松たけ
つくし

同 白魚やき
もの

平汁
丼の類
大平

同 赤の芽みそ
魚でん

但尾張つけ醤油ハ殊の外客人の好ミ
客人の気に応ずる事肝要

同 千切大根 海魚ハ後川魚ハ脊を
千条こまぐ切りまぜよく絞りそのの
汁ゟ引てかるく焼やき

仕様
湯へかし湯を入湯の内もまず引揚し上へ投かくる
汁ゟも添ずまた上へ切ものを載るそれ計

同 うわあつすまし
葱 芥大こん 切り

同 ところ雑

同 雑魚
雑を大さいの目ゟ切の竹ぐしろ〳〵大こんのもぎり
汁と卵黄油合よくのもし沢山ようける

同 からわり
卵黄

同 うわあつすまし
葱 芥大こん 切り

同 ところ雑

同 雑魚
雑を大さいの目ゟ切の竹ぐしろ〳〵大こんのもぎり
汁と卵黄油合よくのもし沢山ようける

同 細魚
挽焼 塩焼 椒醤油つけ焼 まぜ〳〵にさ〳〵そ

同 ひしこ
尾附ぜんぶ焼をあぶり焼をあぶり交せう大こんよ仕立九ぜんぶくろ
塩焼大こん おろし 大根をおろし

同 こさざ

同 老ら魚 湯葉 しんせんまめ 蜜合せ沸湯を入る
牡丹 ゆでへ 葉ものゆ 加減 煮ざまのり ゆでへ
ひしほ 漉べし 余もこれの准也

同 鰯定家煮

同 鮒のぞうめ 佐格 さゝ身の揚焼をあしらひみそまぜ交煮る

同 車えび田がく 佐格 尾のうへまでさんせうみそを塗り焼

同 烏賊 木の芽 ごまあへ
佐格 生ぐりくり切煮るまでもつともつかく
らくおくせうゆ煮汁の中へ入る

同 鰻ひの絡煮
貝焼 佐格 せゞバ格

同 鰻田がく 佐格 角ゟ切まぶしさんせうみそ

同 鰻卵見 佐格 卵の中へ小魚粉を入せうゆを垂

同 鯛 佐格 ゟどうくの汁をうつる

同 鰯あら煮 佐格 骨をうけらんゟ切丸むきさゝがき煮らく
もゝやきくも同断
茶壷煮ゆを添る。

刺身 鯛 鮃の類
猪口 おろし紫みそ 佐格 ゟどうくの紙は包うもく味をうりやきおこ
せんそ 紙をとり 煎よさゝ身をつくる

雲丹 鯛 佐格 柚子 むきの肉のみそへうす塩そのべる
猪口 いり酒 鯛ゟ身どうくおく湯煮へし 拵へ 煮ゆと一つ塩
ぶつのゆへ酒を涙みりける

牧ヤ　そば切あるとき
かけ　なべ焼　どんぶり
盛合
春　牛のまえん　夏　ぬくめざけ
秋　初松たけ　冬　つるみそ
大湯みあるときは吸もの出べし

右の外料理仕方種〻有とゐへども料理本よ
譲くおよそ畧之勿論椀并面向を迎必ず私の
伍什を忘べからず傷食の恐もあれバ汚のこゑん
古今之料理本及び魚毒禁忌の書よろしく有べし

大概を左に記其書よりそを引有べし

花　献立集
会席料理　細工庖丁
新撰庖丁抄
名飯部類
大和本草
食療正要

当世風料理　寄合庖丁
素麺篇
豆腐百珍　前編　後編
巻懐食鑑
此外会席料理帳　卓袱会席趣向帳など

そのふうのこと
そ外飲食の書類あり
せざるをバ銘員を暗に

四九 客人長座あく酒食を出を狂のうバ客人なき
久く仕の者へも座敷の都合を見計ひ飯の
菜よ成ざる有合の平を手皿の数へ沢山
盛くまの物を添基下を中の口椀の蓋を仕
五十 待の場あく成とも菓漬を出すべし
酒を出さゞる方すゝ仕の
迄も菓不拘よ成却て世話



客事杯あり
但時宜よより菓漬斗や酒直きを方すゝ
尤き多人の仕ハ兎ふ不堺あるものを
ざれバ其時宜よりく酒を飲を不戸狭を
辞宜をるとも好極なくバ出もすゝ
給仕ハ大振ある盃猪口を小振の菓椀を飯の
杓子へ載間徳利を銚子へ入多人前き合を多
斗も酒を入多人少へ揃中さる宜ゝ採云て飯杯一同

出亜鉋その他ハせぬ方よし　餘呑込しか都て客人の
面同よ拵るもあれバなり併しく　梅干を硯ひ
飯よ掛しも茶碗よ湛と茶を汲望よ裁出すも客の
脇へ茶碗を置く亜酒食添しも同しく挨拶
〳〵く鉋る事ハ茶ハ煙草よ限ら須べし
但座敷の酒食添〳〵ハ客人もあり仕のもの
酒食添や茶や亜ハ立客人もあり仕のもの
世話〳〵ハ客人もあり仕のもの
世話〳〵ハ客人もあり仕のもの
世話〳〵ハ

主人兼菓かゞ〳〵抔客人へ挨拶よろ
五二 母妻娘妾抔客人へ婦人對面せば茶菓を隔を
客人より六七尺も隔を主人の脇か一疋の方へ
出格式よ拘ふ一二間も叮嚀よ應對して奥へ
入屋し親類緣者數多の客抔へ應接せるとき男女雜座せば何事も心易き有
屋ふべ併主人同席よ居ば其よ應ずる程能
お和ぎ寛ろぐべし勿論客のうちも
主人の氣質よ隨ひ文書ふ其種ふ異くべき
主人より淡ど重屋ふれ
但男女とも客人と擇別時代遠ひの主人へ參る
用談もあらバ主人夫婦よ任せ苟且應對して
引込る方よ大概出ずともよろし酒
宴の中へ出客人より看取らバ程よ挨拶
して給仕よ拘せる欲ず自身拵らく引込る方よ
小兒もあるとよ准ず佛林狗貓を必出すべからず

暑中酒宴の間時宜よき主人より座へおかず
など給仕へ云付る

五三 給仕勝手へ行ば該座産婆へ戻り勝手水手
座敷人ありては跳子の酒よきやうを考
但跳子の量を考又は間違利を振べく跳子を
撰ぶく幾升酒一と通りの雑用も勝べし
間違利ありても持ぐくも勝べし
酒かりそめと思ふべからず跳子を撰ぶ主人の損へ出ざる
勝手へ下物を調ひ膳を設ぐべし
柄杓を添座へ持出日あふりの雫を拭手よかるべし
招客人の見通しへ一面に水を打
但一扁雑ふも又雑と手二度程もおぐれば地息
去ざるものの如く座へ足跡の見ざる様よ
心得べし
勝手へ入り座を拭産婆へ出ざし
客人酩酊次取紛吸物の出しを心得ぞ主人を

同格ニ吸ヒ成ハ挨拶延引セバ

五四 給仕より主人へ向ヒ吸物ガ出マシタト和ラゲ云フ

主人より客人へ吸ものと挨拶なほ客人吸物を吸掟を下へ置る時主人より酒を勧る

五五 此時拍子抜のせぬ様ニ給仕の着衣て跳ネ退き亜爾酌をすべし跳ネ方ハ本式と表裏あれど成丈

客人の前ニ盃の有時を見斗ひ暫らく併度毎ニハ不興なり是又よく斗ひあるべし客格別貴人あらば銚子替りハ客人へ断先主人の方へ一盃試そ客人へ勧むべし

五六 給仕酒の肴を小皿へ取り出さば大平ハ其まゝ鉢井の類ハそも盛る姿ニ做ひ初ものを預ハ用ひ抔出べし

但初ものの預ハ用ひ抔出べし

山葵抔の招よき萬上よ哉くるも見苦し併
下へ盛込一向形の見えぬやうへ塩なるべし
但うハ垂の抽木の芽山葵の類取落さぬ様
心付べし

五七 盆へ載持出見手ひ外の品をおし脇へ寄せ小
皿をとりて出すべし

五八 客人も亦も看取て出しくるを仏前供時

五九 若亀相応く菜着取落さば通盆の上へ戻して
下ゲ影らぬ着を外の盆へ載抔出すべし併看
取掛る時も先外の着よ付くある格別汚穢ぬ
着を仮よ用ひ間を合垂くるの落くる着を
引替べし

六十 小皿ハ兼く盆へ載給仕の係よ垂入用の度毎
持出寄べし酒席の中へ出すべし

六一 給仕を通斗ゆく客人と主人お初めゝバ小皿も銚
子も主人の招へ垂酒の間を外ともおゝ〳〵脊べし

六二 客人長座ゆえ給仕お恥ぞゝくバ勝手へ入り
まふく肌を脱ら拭を水よ浸〳〵ゆをつゝへ座へ
出べし夫ゆえも垂〳〵ずバ多の低程ら拭を濡〳〵
脇の下脊中腹まそでも一二扁拭ゞ〳〵上ゆ
あ足の指ゟ股へ一つ二つ程宛灸をもよし
但灸ハ座ゆ勝よ仏脊ゞし

六三 脚痿ハ足の大指さへ折〳〵動せばよしと云ことあり
呪逆ゆくバ勝ら多へ入りあの平へ台湾平座と
指ゆく書てハ諜ゆくバ諜三度ゟもバ那座よ
止なり

六四 明〳〵る小皿ゟ外の着出〳〵ゟ時引器勝ら多へ入ば
ゞし

六五 但喰残のゆゝバ生ゟ外ゞゞし
客ゟ程なく盃も納るべき格なゝば間を見合

苟且勝手へ菓のるを有べし

六六 いよ〳〵盃納るとそを主人の差図を受く能を引

但間徳利も同断なり

六七 客人飯よ掛る主人盛暫て上べしと給仕へ云付る

給仕飯を盛んと客人の前へ通盆を出して客人

夫よ及ぶべと云バ遂ぐと盃を引其侭元の座へ

戻亜よ勝手へ行よく盆の上へ薬籠薬を亜

菓茶籠を載菓漬あらバ菓漬もそと載持出

主人出菓漬をいふ

戻し

六八 給仕菓茶籠菓漬を盆よ載る侭客人の前へ

持出菓を掛ると掛ざるとハ客人のみよ任せ元の

座へ持ケり亜べし

但菓を掛る時そ菓漬茶碗を盆へ受取自分よ

前よ亜菓漬を上のるく掛菓を洒ぐら飯の

上への引菓子書捨よ一面よ掛安き事我
招膳の脇へ出すべし

六九 此時通盆ハ給仕の左の前飯鉢ハ通盆の右菓子落ハ
給仕の左り脇へ置給仕の備をすべし去かるべき
客人と主人の居所よりそ其略をすべし

七十 廻り出る酒の肴小皿の影を下べき和ど給仕
客人ゟ呼ハ直ニ出向ひ客人も心世話しく
思ひ不敬なり只客人の飯ハ茶椀ハ人を以給仕
もすべし 勿論給仕武人もあるべし客人ハ右ゟ
飯の給仕よ和客人を後ゟと酒の肴小皿杯
下げし 併客人の指廻り先小皿ハ先ニ重
ねし

七一 主人ゟ飯を出替ニ其の通持添客人の前へ出自
給仕飯鉢と盆を其の右ゟ脇へ盆を出し飯
茶椀を受取自分の前よ重飯鉢の蓋をあけて

取仰向よ仕ぐら飯鉢の脇よ垂茶碗乃縁へ
指の障らぬ様よ通盆より茶碗を取上
左の手平へ載右の手よ茶碗の底中を同様よ
二枚ヶ重程よ飯を盛扨飯鉢の縁へ掛ク
中へ入飯茶筅をよ通盆へ載垂
但飯鉢の中を拵る様よ仕度ら飯の塊ハ飯の
替茶よ透を見合せ向ふより手前へ掻寄様よ
扨ヶ重ね武三度よ解垂方よ仕飯鉢の蓋

七二

扨ヶ重ね取方茶碗よ唯ず
表よ垂ク元の通飯鉢の蓋をしく飯茶碗を
盆よ載ら侭客人の取廻様膳の右手脇へ出
座ー
主人何ぞの饗さんと思ふより勝手の都合を
忘風ら出平なりと云客人も辞宜
なく左様ぁらと云て扨の差茶ぁるをも
主人ハ有ば給仕よ向ひ時宜よりて勧ぬ

上座一とゝ今めし一盆梅を甘とゝを幸とゝえて
勝手の都合を取繕ひ重箱も笑止ゝしと一膳
主人も客人も簾忽なもバ互の和をゝ旨さゝ方
宜ゝるべし

給仕ハさゝゝゝゝ躰ゝして傍へ指の達ゝゝ
指よ事を盆へ取蓋をゝして猶ゝへ指ゝ主人の
云付ゝる通を料理する人へ云ゝ告知ゝるゝゝ
彼の次第を悟ゝして笑又ハ為右と主人を

七三

格別指ゝ指ゝそのゝ働ゝと云べし

勝手へ呼出ゝし遠ゝく外へ招出ゝし我此彼此鍋の蓋
抔ゝをゝゝゝゝ

抹へ入寸法盆より載菜着を添指出候ゝとか
四へ取客人と主人の膳より拵へ引替より膳へ
下ゲ候ゝ

（ここに割書あり）

主人餘り何もなく是成と称客人へ挨拶よろの
七四 其内平の椀も出すべき盆へ載拵盆蓋の
侭あるなく客人の膳へ載べし
七五 別段の品差出候より前来
四名抹ゝく主人へも同様より出すべし

主人時宜よ隨ひ客人へ挨拶ス
給仕見計ひ前の通飯鉢盆を取飯
をよゝく客人の膳へ通盆をなし飯を
替ゲ
七六 猶又其後見計ひ飯を替んと通盆を出候ゝ
ども客人申辞義なよろ抹挨拶なゝバ
一通りなく通盆を遂ゝと引込申べし
主人も今ゝ一成と て無勿客人の

挨拶よ仕せ方指ず～出錠を入ル薬を上べ～と
給仕へ云ふる

七七 給仕飯錠を元の座へ引 重薬薬箱を重へ
載くる仕舞重を指添客人の前へ指出自分お右の
脇よ重通重を客人の膳よ右へ出～薬漬薬盃を
受取重を洒ぐ出～えの座へ引

但薬の洒方前よ准ず

客人重ものを仕廻着を納重人へ挨拶よ及ぶ

七八 給仕前の通飯錠と通重を指添膳よ仕ず

七九 薬箱薬瀬を盆よ載るまく仕て湯をあつ
入火よ掛る程錠揚て

洒の肴よ煮を下ケ

八十 膳廻の小皿重硯の類を倍るよふの程能
客人のふよふ重人のふを後廻くよ重て載
仕て重硯を洗重拭よ膳よ膳の前よ清し重

〔八一〕客人の膳を下ケ主人の給を下ケ

〔八二〕茶を湛没ぐ客人とも一緒に置へ

戴納数を添抔出一つ宛納致ス前の通客人へと

主人へ出ス納数を置へ戴納致ハ次の間迄下ケ

襖際より垂を掲ケ置へ下ケ

但し肴の茶黄を礼なきバ抔ス

〔八三〕煙草盆火鉢の火抔前の通客人の前へ

垂をべし

但火入の火灸くバ前の通引替べし火鉢の火灸くば

鳥府を去ル抔出火鉢をおこし置へし

炉ある処ハ炭を装 根元の灰を平し火鉢の

縁抔流麁を拭ひ垂べし 釜脱抔の

抔もくも臭ふの悪紙屑も雑と垂べし 茶時分

鳥府なくバ墨火鉢へ炭を出つも入抔夫も

〔八四〕右の通脇其外ともを下ケる跡もく茶盛よ

物あ〳〵バ鼻紙或ハ枚懐中より取出雑と掛く
垂べし

但給仕の者鼻紙自分入用ハ迷惑ゟ
自らハ此てあいせもとぎくく
ハ紙の数も弐帖も与垂べし

八五 給仕ハ風邪ゟく度く噴嚏出掛〳〵バ自ゟ
後ろへ向鼻へ袖を当べし 撮バ次の間へ立ル角へ
向くく大きく吾ゟせぬ様三度程よかもべし

客人便所へ入ん と垂ゟへ挨拶〳〵く掾頬へ出
掛〳〵バ垂人ゟ声を掛ぬ様ニ

八六 給仕ゟく見計ひ障ゟ
待受織採脱掛〳〵バ是へと云ゟ
但袈裟のゟハ格ゟ

先へ立此方へと案内〳〵く役和入口ゟ
ゟく脇へ寄き客人大便の格ゟ
掛ゟ合ゟ後ゟ後を傭て立後の払是へと云く客

人の出さる物の初めて客の通神にて陽り三等
上の席を右の方へ導く持栗方の下へ方の席を苟且
添受取見乎ひ便取り二三間を送りて去かに
居家役和の方より座定まらば客より扣居べし
勿く扣居べし

但客人の物れ初も悪くとも見苦べき
物の扣掛あるを客人猶先をさゝぬ時ハ自水
鉢の席を戻し自掛を衣雑と片なめそめを



方の席より扣晩く扣べし
若史出掛ハ方の神を都よ尚べし

客人座安めく自拭鼻紙を巻仕舞を素
鼻帋懐中より見ず自分の懐中より合の
鼻紙を上日多枚を衣折出すべし一方一
給仕も客人も失念して便所へ入くの跡始
客人より紙ハ鼻紙又六枚重ねの
内を見の初種の方へ導く戸の遠き迎

招よ客人へ出すべし

八七 客人の役有より出るもの

庚晩く去のもの

右のもの柄杓を取る

客人の宜といふまで掛ること

無用

但客人の衣裳へ漆の移よき

同き刑湯桶を塗湯桶成とも

なくば通至へ



懐薬碗を載時候より湯なりとも沢山

入る水鉢の如へ招ること無用

但客人の掬ひ招居る時給仕者人ハ刑届

ず給仕致人ありハ客人役所へ這入ること

掛頬まで庚此を合すべし掬の把なくば自分

ゆく揚るへ刑とも産安の形合より桐士乃

給仕へ該ぎるともの

招ひ招るべし

湯桶あらば茶の通掃の物を持客右の手に湯
桶を持湯呑くと宣とこまで酒掛客人を掛く
仕処一時おの通掃の物を持客人へ渡を
但掃のものなくバ太の手にて湯桶を持あの手
に掛を持湯桶の口に附根の下へ添湯呑はくと
酒掛べし

煙草盆あらば茶の通掃の物を持客右にて手
盆の傍客人の手前へ出すべし



但掃のものなくバ右のごとく掛を持添盆の傍
あるものなく出すべし

客ハ座敷次の間へ用意しおく事を
承ハ座敷へ挨拶を述つゝ
次の間より煙草盆を持出客人の上下袴着の
取始末しく客人の前へ置よ亜客人
亜よ小使亜へ灯時を客人の足元能よく拭
自分の髪のほつれ等を直し客人の前へ出

そよ立ち門口しく猪の如くバタ〳〵と駆け来り且つ重き腰の物を持ち添えて右の手を持ち左の手を以て燭を持ち足元を照らし後ろ前に成りて一二町も先へ行き扨又後ろの方も能く見えるまで送り行きて後より重荷の荷物を持ち添えて客人の後より行くは自分の荷物を重荷の客人に渡すまでの事なり右の手の如く猪の如くにして多勢を引き連れ水神の社へ参詣する客人乃至歌舞伎芝居へ参詣する場合には男女共に手ぬぐいを以て頬かぶりをなし着物の裾を端折り尻を揺り揺りて歩行くも不体裁と思ひ懐手にて歩行くも不体裁なり故に普通の歩行にて水神の社へ参詣するを以て正しとなす

一女客門の時客人より酒機嫌宜しく愛敬を振舞ふ事

酒を飲む事は勿論なり

一女客門の時客人より酒機嫌宜しく愛敬を振舞ふ事

酒を飲む事は勿論なり

悼のごとく客人へ多燭を設べし第も
第ノ准ず

八八 客人若酒を辞唑んとせば強ひて
中脊中をと云つゝ右の如く
遍まで上より下へ引撫客人唑仕廻を宜しと
云ひつゝ後へ引客人の先を立多弁の和を戻
第の通右の如く柄杓を以水を湛ふくと
二三扁このけ垂水を上ぐるとの

客人まづ及びごとく水鉢のごとく
漱をせば手拭をも時宜よ庭乃至
若漱をせまば客人へ手拭仕廻一時第の通
腰の物を客人へ渡し一揖多へ引ふく漱茶碗を
堕ものへ水を湛入くに至へ載盆客人へ出すべし
但客人も水注ひあらひ
時候の寒暖魂を制限をかの事わるとも
客人ゐへ對し一向障第ほ勤兼しく

客人元の席より若干人便所不掃除之を給仕より向ひ雪隠を上下へ招とりよ

九十 給仕若の通筆を出すべし若客人筆を腹

拭ふなくば白湯を出すべし若客人筆を腹

但紙袋筆より准ずべし

若自然天より成る客人の宅の途中雨降とも

主人より密よ給仕へ有客人の下拵傘供の

雨具共仕度を致すべし



八九 手水澁々々ば上下待羽織を着の通順の

取て客先へ立客人の席より側楊頬杖して

落ちを開客人を産安へ入落ちを盛自分を

着の通足袋ひ落ちを開這入るべし

但戸落ち襖ハ拵二寸程を明くとて度

引寄二度程拵へ盛るべし是敬の戸落ち

襖ハ右より准ずべし二度程より盛るべし

九一 給仕客より他の者へ用意ありくバ勝手へ引下ケ
傘を取ル
但下駄用立候の客人へハ式三百文位の張紙
傘も可ニ有之一ハ大概傘持
る傘也
客人の氣象も知ラるゝものなり
むやたの儘を粧候ハ丈夫ありくバ所の風俗
より緒ハそも〳〵用意ニ
他の者へ渡ス事ニ
客へ渡ス事ニ



客人へ云ハヽ
但客人へ貸ス
の通ありく借ル用意ニ
より何ニても小取ありく客人ニ
若駕籠用意せバ
九二 駕籠の門へ
駕籠屋も急ぐ
とゝ有合ニ
時宜ありく客人煙草ハなくバ
煙なりと引煙成

但掻炭を種べし掻炭多くバ雑炭も能
燃し多ハ浮ん種べし併客人傷火ぐる義
湯壷抔焚ん抔よく心得べし
凋客煙草入ぬる客人多くバ時宜よき煙草
たゞすことを入べしなお其外客の着も掻ひ掻ん方肝要ゆへ
時宜よき人へ云少重べし
但客の義用ありてぬるを客人よりとく来の
ある人へ客より客ぬる人今程掻と勧れ
ども強く立んと見ゆる時
九三 給仕供へ出る時
出入口へ供の出ぬる重立
ぬる客ある人へ報ん義を知しぬる抔と
重人抔供を能

給仕へ移る

給仕客を伴ふると雖も通常の衣服を着し立

客人のみ多人へて濃茶を喫する

九四 此時給仕内客を待遠くさし置く他の者へ次の席へ案内して玄関の座敷へ伴ひ客へ下駄を出して拭べし玄関の座敷なき所は客人の立ち居ぬ様に

但客人多僕あらば客人の立ち居ぬ様に



考慮なく下駄を拭ひ履物を揃へ重ね刀掛を用ゐ時を量り又は次の間へ持出し重ね手拭を掛物の物を着よ准じ取出すべし傘は玄関へ持出し客人履物を履ふる様よ取扱ひ

九五 客人なくば客人と共に服を改めて立ちそべし

前よりも少く次の間北縁も行燈も
玄関をも不客人の出に燈籠へ片寄へ玄関へバ
不置へて和尚
但客人参詣へバ挑燈へ燵燭を挙し自分
招よき亜客人履物を出いる時挑燈乃明を
弓を向ゆして客人の右乃方へ出すべし
其節も燵を挙自分の役部屋へ亜バ挙り玄関
招の和尚も是も準し是非ひすべし



九六 門亜尺の事ハ召を見合前屋よ客よ多人へ多亜
多客よ従ふべし
九七 母妻娘妾抔婦人を乍時宜よりて玄関まで
送る屋なれど大抵更よ及び玄関より一間奥迄
客人の通路より二三尺を片寄へ居り客人へ
挨拶して奥へ入屋
但客人男の躰を作立抔よ振り覗べく尺
不女も其後より沉黙く時宜をも屋一併不女ハ

ゐよりの玄関までも出でく傘挑燈かゐ提の義
取斗かことをもべし
准じ足斗ひもべし
主人ゟ客人の格式記念の有無ゟ意じ客人
より先ゟ立發基へ下互ゟ時宜を仕合
但九人の玄関ゟ者へ送り出ることも
あゝバ客人立廻給たゟ提燈へ押付て取る
方ゟ玄関格の所ゟことを見ゟ准じ足斗



あるべし

客人下座敷掃ゆく弥仕へ挨拶をもる

九八 給仕大抵ハ泥塗ゟ時宜をもる

主人供へ向ゟく出供ゟ儀と云上へ立ることあり
客人の門ゟ戸を出ゟ斗を見送よへよるもの
又ゟ玄関座敷次の間掃ゆく時宜して奥へ
入をもべし

九九 客人ゟ義ゟ茶バ給仕跪ゟく左のゟゆて勧ゟ義の戸を

引窓垂右のもやく座根を上ゲ客人ヲ玄関へ這入さる時座根を篤と下し垂戸を閉客人の笠外工ヤを客人へ気換抔よ仕まべし

但烟ヲ入烟草ヲ客人の孫の着ル方ヲ垂入垂ば又手ヲ拭ヲ客人に出ス烟草入ヲ烟草ヲ入ル垂ヲ客人の方ヲ垂

百

給仕ハ客人の門ヲ出ル迄ハ座敷の内ニ居ル事但客人門ヲ出ル迄ハ座敷の内ニ居ル事

客の事客人の辞さる為ニ座敷ヲ閉ル事ヲ必大切ニ致ス事

ゆく前のべる客人ヲ

衍程ヲも見送ル事

玄関ヲ外の障子襖ヲ閉ル事

烟草盆火鉢ヲ外ニ持出ス事

着へ出し垂ル筆硯烟草盆ヲ引込ル事

但筆硯ヲ烟草盆の外へ入たる盆ヲ片ヅケ

座客よ慶くる物あらバ独掛垂巻うハ牡史仮初の
方までも見めり火の用心取落物掛改
個客人為取落物あらバ直ちに人へ出もべし扨乱
中会書物を分包てる物掛を必ずはてえべらず
座敷次の間等を掃出し若らならバ雨戸を外
更くよ締をして燭台を携へ夜廻べし

臨時客應接終

日本橋南通四町目
須原屋佐助

## 金花堂藏校目錄

源氏忍草　五冊　成島公序

此書ハ源氏物語一部の大意を初学の人に
為めんために耳ちかきあやまりをもとめ
ひろく源氏を学ぶ人がためにまことによき書なり

萬葉楢落葉　五冊　正木千幹大人輯

此書ハ初学の人よく物語んとする物学のつまづ
き葉集の中より六百余つゝを抜出て解
一の巻　天象の部　二の巻　地儀の部
三の巻　作法の部　四の巻　人倫の部
五の巻　動植器財の部　六の巻　雑歌の部
堂沿ふて学ぶべき書なり

千鳥之跡　一冊　中臣親満大人著

此書ハ歌学の短冊かのごとくにて
さま〴〵古人の真跡或ひハ古書より
考へ定めらまたる書なり

明季遺聞　四冊　清鄒錫山先生著

此書ハ清ノ鄒錫山ノ手輯ニ明末李自成
ノ乱ヲ倡ヘシ本末ヨリ清ノ闖廣ヲ平定
スル支ニイタル國姓爺ノ事實等コノ
書ニ詳ナリ

歴代帝王承統譜　折本　一冊　紀藩春川先生校閲

此書ハ唐虞以来清ノ道光帝ニ至ルマデ
スヘテ漢土歴代承統ノ主ヲ系譜ニ作テ
歴史ヲヨムモノニ便リス

草聖彙辨　八冊　清朱竹垞先生摹輯
皇國永根文峯先生校字

漢土ニテ歴代諸ノ草法ヲ集メタル書数多アルガ中ニ
此編ノ精善ナルニハ我朝瀧本親王ノ書ヲ
モ此編ニオサメ出セリ始メニ畫ヨリ三十畫ニ
至ルマデノ檢字アリ此ニ因テ字ヲ索ムベシ第八
巻ニ草法母觀ヲ附シタリ草書ヲ学ヒ玉フ君
子珍セズンハ有ベカラザル書ナリ

## 古今選　三冊　本居先生輯　村田並樹大人校

此書ハ本居大人ノ古今和歌集ノ中ヨリ一代集ノ中ヨリ撰ビ出シ玉ヒシ歌ヲ撰ビ玉ヒテ書キ加ヘラレシ書ナリ

## 類題和歌補闕　六冊　加藤古風大人撰

此書ハ古今集ノ歌ヲ部類シテ各題ノ歌ヲ二ツ宛載タルトコロ古今集ノ歌ニ洩レタルヲ撰ビ出シテ補ヒ玉ヘルナリ

## 唐物語　一冊　西行上人作　清水濱臣大人標注

此書ハ昔ノ唐土ノ事ドモヲ載タルモノニテ古今集ノ序ノ如クニ假名ニテ書キタルモノナリ

## 草書前赤壁賦　一冊　天民先生書

此書ハ前赤壁賦ヲ詩佛先生ノ書レタルナリ筆法一家ノ風ニシテ激セズ勵セズ手本トスベキ書ナリ

## 小學題辭　一冊　龍澤先生書

此書ハ宋ノ朱文公ノ小学題辞ヲ龍澤先生ノ書レタルナリ筆力怒張唐人ノ風ナリ

## 瀧本氣霽帖　一冊　猩々翁真跡

此書ハ酒ノ縦集ノ詩ヲ抄出シテ猩々翁ノ書ケルナリ書ケルナリ

## 堤中納言家集　貫之朝臣書

此書ハ堤中納言家集ヲ紀貫之ノ書ケルヲ板ニ彫リタルヲ摺ルナリ

## 草書千字文　一冊　屋代先生書

此書ハ輪池屋代先生ノ筆法ヲ見ルベキ妙本ナリ

## 假字考　二冊　岡田眞澄大人著　鵜齋先生漢文序　濱臣大人かな序

此書ハ假字ノ正シキ事ヲ考ヘタルモノニテ古事記ノ文字ノ違ヒヲ正シ玉ヒシ濱臣大人ノ考ヘラレタルヲ大人ノ書ケルナリ

## 新朗詠集　一冊　眞海柏木先生輯　素堂山本先生校

此書ハ古今集ノ序ノ如クニ文武天皇ヨリ傳ヘノ比ヨリ今ノ時世ノ人ヲ撰ビ出シテ古ヘ詩ヲ好ミ玉ヒシ事ヲ述ベ玉ヒテ古ヘ詩ヲ好ミ玉ヒシ時世ノ有様ヲ撰ビ出ス故ニ作者ノ時世ヲ知ルベク又漢文ニ付テ古人ノ書ケルヲ大ニ益アル書ナリ

## 歌仙繪抄　一冊　藤原正臣先生著　喜多武清先生模画

此書ハ作者ノ系譜及ビ古ノ名ヲ改メ名ヲ換ヘ名ヲ易ヘ玉ヒシ事ヲ武清先生ノ畫ヲ加ヘ玉ヒテ

## 幼稚画手本　一冊　柳圃堂主人筆

此書ハ幼稚ノ為ニ花鳥ノ類ヲ部ヲ分ケテ玄對先生ノ画ヲ模シ玉ヒシ手本ニテカヽレタルナリソノ奇絶ナルヿ一本書ノヒラキヿ見玉フヘシ

## 玄對先生画譜　三冊　玄對翁筆

此書ハ人物花鳥ノ類ヲ部ヲ分ケテ玄對先生ノ画ヲ模シ玉ヒシ手本ニテカヽレタルナリソノ奇絶ナルヿ一本書ノヒラキヿ見玉フヘシ

## 西音發微　二冊　柳圃先生遺教　大槻玄幹先生著

此書ハ西洋書翻譯ノ時西洋語ニアタル和音唐音ヲ撰ヒ對註ノ仕様ヲ詳ニサトシ西洋字原考ヲ附シタリ

言元梯　一冊　大石千引先生著

あの書い何のえろ義を俤ま考究めら是ゆえ梯名ハ俤まのらゐく梯子の事ま書ま〻わくの梯のいひまわしの事ま引お證しる何ぞ一切ぐらくすゐくお書の約書引お證しる何ぞ梯ぜ俤ま洋ま洋ま洋

うすもう色目　小本彩色摺　一冊
俗称鼠ねずみ色ともいふ四季ともによろづ用ゐる紙合なり
縣居雜錄補抄　一冊　賀茂真淵大人著　長野美波留大人標註
この書は歌のいろくの事ども又雜のいろくの事ども記されたるものにて縣居大人の考へをよく知るべき書なり
武家用文章　一冊
此書は武家方の文書に用ゐる切紙のいろくの雛形書にて古代の書法をよく知るべき書なり
武器袖鏡　三編　一冊　同著
此書は現在する古甲冑五十二種の威色を彩色圖にあらはし甲冑製作に便ナラシム


等ニ至リスベテ武器ノ圖式ナリ


截縫早手引　横本　一冊　女中必用
この書は裁方男女ともに縫方の仕様を圖解したる書にて裁縫の手引草なり
廣益諸家人名錄　二冊　詩佛山両先生序
此書は現在の儒家書画家有職家より篆刻家等に至る迄氏名住所号を記したる名鑑にて便利なる書なり
臨時客應接　一冊　耒学堂先生祕授
此書は先師祕傳の奇法にて取次ある時は用をより客人の好む処を知り其意に応ずる秘伝を記したる書なり
繭養法祕傳抄　一冊
此書は蚕の飼ひ方より繭の取り方まで詳細に記したる書なり
皇和魚譜　二巻　丹洲栗本先生纂
此書巻一ニハ河海通在ノ魚類凡五十一種ノ圖説ヲアゲ巻二ニハ河海通在ノ魚類一十三種ノ圖説ヲアゲタリ海魚ノ中ニモ性味良毒ノ辨シカタク混ジヤスキモノ此書ヲヨミ玉ハバ分明ナルベシ
穂立手引草　一冊　醉吟居主人編著
富士根元記　一冊　鈴木頂行先生授
この書は鈴木翁諸国を経歴せられし後富士を主として浅間神社ふじ講社の沿革その外の地理をくわしくあらわし諸書によりて古今をあげくわしく説明のまの一部なるべし

金生樹譜　三冊　長生舎主人編

松葉蘭譜　一冊

古今名物類聚　全十八冊　不昧公著

日光山誌　五冊　植田孟縉編

更科日記　二冊

古今和歌六帖標注　契沖阿闍梨　平田豆流校定　加茂真淵翁校本　山本明清校注

産家心得草　二冊　羽佐間先生口訣

爲己執記　一冊　羽佐間芝瓢先生著

勧善忠義傳　二冊

画本勲功草前集　五冊　山崎知雄大人輯　喜多武清先生画

須磨のやいさご　一冊　中臣親満大人遺文

言志録　一冊　佐藤一齋先生著

江戸町鑑　二冊

江戸町ばくし　一冊

袖珍名鑑　一枚

手紙通用　書状獨誓古

張氏醫通　廿七冊　明張路玉著編

小説土平傳 一冊

俳諧人名録 二冊 東都惟草葊先生輯
此書は當世の俳諧家の人名をいろは分ちに
したゝめおのく其下に其名を出せり

俳諧職業盡 二冊 茶靜大人撰
梅令大人校
此書は蔬菜菓物魚鳥牛肉雜事の數ゝ
俳諧の書ものせる凡ゆる職業の事をあつ
めくわしく書おほせて後世の人に俳諧
をおしへたる書なり其世話を會せてもたゞ俳
諧ばかりならず人のくらしの書をよく
調ひもの多くなりぐさとおもふべき書也

俳諧年表録 一冊 尺齋豊山翁著
此書は貞享より當時までの俳諧
の名人の事跡をしるせる書也

觀世繼部大夫校正
謌本百二十番 寸珍本薄用 全廿二冊

繪本三國妖婦傳 上編五冊 中編五冊 下編五冊 合十五冊
此書は三國の妖婦の故事をおもしろく
編述せる大作もの也

五百崎虫の評判 一冊

魚獵手引種 一冊

俳諧發句題叢 四冊 椿立太節翁輯
此書は和歌の頭辭をおもしろく近代の俳家
一ト七十二人の發句をあつむ其首ゝに
其家の名号をしるせり

千五百題發句集 二冊 黒瀬曽見翁校輯
此書は古今名人の發句を數ゝしるしてそれに俳
諧ふかきをぶんのなどうかゞひ古人の前句古
句をつけ〳〵今人となりて

芭蕉發句小鏡 一冊 雪中庵蓼太翁述
門人三竪著

同外 近刻

早引二體節用集大成 全一冊

大寶百人一首紅葉錦 全

桃花百人一首 全

錦百人一首 書發山流彩色入

瀧本六旬帖 全

同三十六歌仙 全

千蔭先生書 正居帖 全一冊

同新百人一首 全

萬葉新採百首 全

大欽和歌 全

此書は數句案じ方の手引となるべき
すべて俳諧仕立のくわしき書也

梅室家集 二冊 梅室先生自撰の集也

梅室大人附句抜萃 二冊 勢南菊町翁編輯

今人明題集 二冊 双雀庵氷壺翁輯
此書は大保の物比ふせんなる俳家の
秀句と數ゝの句葉の明らかなる書也

未葉俳諧集 五冊 双雀庵未葉翁の家集也

俳諧發句朗詠集 初編一冊 一名口調亀鑑
此書は宗匠家の撰びおのく同じからざるも
百花多きがごとくそれおのくの特有る發句
をあつめたる俳家の評ある發句をあつめたるなり

俳諧合鏡 懐中本 一冊 拙堂芦丸翁撰

同古今かな序　全
同往かひ振　全
真草千字文　全
同用筆類　大中小色々
同稽古短冊式紙　色々
画法高尚往来　全一冊
同やこ名所尽　全
草書千字文　天民先生書　全
繪山庭訓往来　全
万宝古状揃　全
御家流高尚往来　かな附　全
実語教童子教　全

抱一先生画譜　一冊　彩色入善本
近代名家画帖　二帖
名家画譜　一冊
彫物画手本　二冊
繪本百物語　全五冊
繪本大和錦　近代名人　全三冊
古今名馬圖彙　全三冊
繪本金剛傳　全一冊
繪本武者揃　全二冊
繪本勇士鑑　全二冊